

◆ 編集後記 ◆

最近読んで面白かった本に内田康夫の「追分殺人事件」がある。この小説では、軽井沢近くの信濃追分（しなのおいわけ）が舞台となっており、この地で有名なのが信濃追分節である。信濃追分節は、小諸から碓氷峠を越えて、松井田の坂本宿まで通う馬子（まご）たちの労働歌だったものが「追分節」という民謡になったといわれている。この地で生まれた追分節は、北国街道を通して北へ伝えられ、各地で根を下ろしながら、その地にマッチした追分節へと転化していき、北前船で北海道に渡り、有名な江差追分になったそうである。

「追分」という言葉は、牛馬を追い分けるということにルーツがあり、それが転じて、道が二股に分かれるところを指すようになった。北海道にも石勝線と室蘭本線の交点に「追分」という地名があるが、ここは道ではなくて鉄道の分岐点であったので、この名がついたそうである。

我が開発土木研究所の歴史はもっと古いが、北海道開発局は今年開局40年を迎え、いよいよ塾年期に入った訳ではあるが、近年、北海道開発局を取り巻く環境は益々厳しくなっている。この変化に対応し、最近「ハードからソフトへ」とか「ニューハード」とか一般の人にはなじみのない言葉が使われているが、まだ開発局のイメージを変えるまでには到っていないようだ。

この不惑の年を迎え、北海道開発局は正に「追分」の地に差し掛かっている。右へ行くのも左へ行くのも開発局の若者の双肩にかかっており、ソビエトのペレストイカではないが、改革に対し若者の一層の奮起を望む。

(中野、大越)

編集幹事会

幹事長	竹内政夫			
幹事	石渡輝夫	上西隆広	野竹俊雄	
	大越威	谷茂	山口登美男	
	小長井宣生	中野修	吉井厚志	

開発土木研究所月報
No460 1991年9月
平成3年9月20日 発行

発行所 北海道開発局開発土木研究所
062 札幌市豊平区平岸1条3丁目
TEL 841-1111(代表)
FAX 824-1226

印刷所 株式会社 日栄舎
札幌市白石区菊水1条2丁目
TEL 811-6161(代)